

201103007A

厚生労働科学研究費補助金

地球規模保健課題推進研究事業

地球規模での保健課題に対応する人材養成に係る研究

平成23年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 黒川 清
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
代表理事

平成24(2012)年5月

厚生労働科学研究費補助金

地球規模保健課題推進研究事業

地球規模での保健課題に対応する人材養成に係る研究

平成23年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 黒川 清
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
代表理事

平成24(2012)年5月

目 次

I. 総括研究報告	
地球規模での保健課題に対応する人材養成モデル構築のための実証研究	----- 1
黒川 清	
渋谷 健司	
乗竹 亮治	
杉山 晴子	
(資料1) グローバルヘルス サマープログラム 2011概要	
(資料2) 講義録	
(資料3) キャリアフォーラム	
(資料4) アクション・プラン	
(資料5) グローバルヘルス サマープログラム2011 報告書	
II. 分担研究報告	
国際保健課題としてのたばこ等、非感染性疾患政策への効果的な提言方法の検討	----- 68
望月 友美子	

厚生労働科学研究費補助金

地球規模保健課題推進研究事業

地球規模での保健課題に対応する人材養成に係る研究

平成23年度 総括・分担研究報告書

地球規模での保健課題に対応する人材養成モデル構築のための実証研究

研究代表者 黒川 清
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
代表理事

平成24(2012)年5月

研究要旨

過去 10 年にわたり国際的な投資額が急増し、世界的に喫緊の課題とされている国際保健の分野において、地球規模での保健課題に対応する人材を日本から輩出し、当課題に対して日本が積極的に貢献することが求められている。

本研究は、地球規模での保健課題に対応する人材養成を目的とし、平成 21 年度には、国内ステークホルダーによる国際保健活動の好事例を割出し、日本の国際保健への貢献を高めるための施策について、国際保健 NGO へ焦点をあてて考察した。平成 22 年度には、前年度の研究結果をもとに、マルチステークホルダー参加型の人材養成講座の発案・運営を通じ、若手の人材養成に向けた、マルチステークホルダーの国際保健専門家関与の重要性を検証した。

最終年度となる平成 23 年度は、さらにプログラムを発展させたかたちで国際保健人材養成講座を開催、講座各プログラムの参加者意識醸成への検証を通じ、人材養成カリキュラムのモデル構築を行うとともに、モデルの発信により、当課題に対する啓発、意識向上を行った。また、人材養成カリキュラムモデルのアウトプットを最大化するために効果的な施策提案を行った。

研究分担者 渋谷健司
東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学
教授

研究分担者 乗竹亮治
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
研究員

研究分担者 杉山晴子
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
研究員

A. 研究目的

近年、世界で国際保健への関心は急速に高まり、同領域へ多くの資源が投入されるようになった。開発援助資金の保健分野への拠出額は、1990年の約56億USドルから、2007年には、約218億USドルとなり、急激な上昇が見られる¹。また、これまでの主要ドナーとされてきた先進国政府や世界保健機関・世界銀行等の国際機関に加えて、ビル&メリンダ・ゲイツ財団等の財団、国際NGO、企業など幅広い機関が、新たなアクターとして国際保健領域に積極的に貢献している。国際保健分野への拠出額が増加し、その国際的な意思決定や影響力行使の機会が、先進国首脳会議やダボス会議、各種NGOによる国際会議など、複層化する一方で、この分野における日本のプレゼンスは必ずしも高いとは言えない。世界最長の健康寿命と高い技術力を持ち、様々な保健課題を克服してきた日本の経験や知見は、世界的好事例として挙げられており、地球規模での貢献が期待されていると言える。その視座において、日本が国際保健分野で強いリーダーシップを発揮するための実証的かつ社会還元的な分析研究が希求されよう。そこで本研究は、過去の研究結果をもとに、地球規模での保健課題に対応する人材養成を目的とし

た実践研究を行い、人材養成のモデルカリキュラムのモデル構築を行った。

1年目の研究（平成21年度）では、2008年G8洞爺湖サミットプロセスを先行モデルと仮定し、国際保健への貢献が確認された政府・政府機関、企業、メディア、アカデミア、NGOの5つのステークホルダーのうち、NGOを選択し、インタビュー調査を行い、国際保健NGO発展のための施策検証を行った。

研究2年目（平成22年度）は、異なるステークホルダーグループがそれぞれの領域的視野を越えて連携し、国際保健課題に取り組むためのメカニズムを検証すべく、海外先進事例研究として、国際シンクタンク機関等と合同で、マルチステークホルダーによる研究会議を開催し、国際的知見の獲得とその分析を実施した。さらには、その知見と分析を活かし、国内における人材養成に際するパイロットプログラムを実験的に構築・運営することで、その成果や活動の意味合いを抽出する実証的研究につなげた。

研究3年目（平成23年度）は、2年目に実施した国内の人材養成に際するパイロットプログラムを、フィールドワークの実施などを取入れ、更に発展させて運営し、国際保健分野の人材養成カリキュラムのモデルを構築した。

B. 研究方法

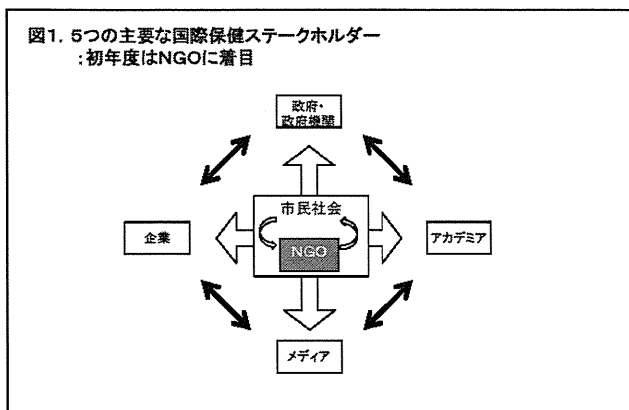
【アプローチ】

研究対象

1年目の研究では、研究代表者らが関与した2008年G8洞爺湖サミット構築プロセスの分析結果を中心に、国際保健における各ステークホルダーの取り組み/成功事例の検証を行い、政府・政府機関、企業、メディア、アカデミア、NGOそれぞれのステークホルダーの国際保健への貢献を分析した。その上で、国際的なNGOの発言力の向上、国内における政治に対しては投票者、企業に対しては

1 *Healthy Development: The World Bank Strategy for Health, Nutrition, & Population Results* (Washington D.C. The World Bank, 2007), p.16

消費者としての他ステークホルダーへの影響力の大きさを踏まえ、国内 NGO の更なる発展可能性が見られることから、初年度は NGO に注目し、NGO 界全体の底上げによる国際保健課題への取り組みの強化について研究を行った（図 1 参照）。



特定ステークホルダーに関して、その役割の発展可能性を深掘した 1 年目の研究成果を踏まえ、2 年目は、財団、企業、NGO などの民間による関与が増加するなど、国際保健課題解決に向けたクロスステークホルダーの連携が必須となっている現状に則し、国際保健課題に取り組む上で政府・政府機関、企業、メディア、アカデミア、NGO の 5 つのステークホルダーが連携するためのメカニズムを実証的に研究するものとした。その上で、当研究テーマである国際保健分野での人材養成は、多面化する国際保健課題とその活動主体に将来的に対応する上で、必要不可欠であることから、「国際保健政策サマープログラム 2010」と題し、多様なステークホルダーが多層的に相互協力し得る人材養成講座をパイロットとして企画・運営し、マルチステークホルダーの連携可能性や相互互惠可能性に関する分析を加えた。その上で、国際保健分野の人材養成について、国民全体での啓発・意識向上を視野にいたした実証的研究を実施した。

3 年目は、2 年目の実証研究を踏まえ、人材養成講座を更に発展させ、「グローバルヘルス サマープログラム 2011 (GHSP 2011)」実施を通じ、国際保健の人材養成のモデル構築を目指した。2 年目の研究で、国際保健分野の人材養成において、

マルチステークホルダーの参画は、「グローバルな視野を持ち国際保健に取り組む人材の輩出と、そのメカニズムの設計」「マルチステークホルダーで国際保健に取り組むための基盤構築」「国際保健課題における日本の取り組みを世界に発信するための先行事例収集」の 3 つの目的において有用であることが示された。そのため、プログラム構築にあたっては、2 年目研究成果をもとに、各ステークホルダーグループに属する機関、団体として以下を抽出し、各ステークホルダーグループから多様な視座を付与するものとした。

- ・ 政府・政府機関：官公庁、国際機関
- ・ 企業：事業の一環として国際保健課題に取り組んでいる営利企業
- ・ メディア：広く一般に国際保健を含む国際協力に関する情報発信を行っている媒体
- ・ アカデミア：国際保健政策の調査・研究を行っている学術機関
- ・ NGO：国際保健領域におけるアドボカシー活動あるいは現地で保健医療活動を行っている非政府組織

さらに、平成 23 年度は、参加学生の積極性を引き出し、学びを深めるため、プログラム内の学生の活動の自由度を高めた。フィールドワークのスキームを設け、希望班については、外部の国際保健関係者と積極的にコンタクトをとり、実際に国際保健と関わっている専門家へのインタビューを通じ、課題の抽出、打ち手の立案、戦略の決定、可能な範囲で打ち手の実行を行う、というプロセスを付与した。一方、学生の活動の自由度を高めるとともに、メンター制度をより充実したものにし、学生が成果物の作成、発表に向けて、頻繁にアドバイスを受けることができる仕組みを作った。

「グローバルヘルス サマープログラム 2011 (GHSP 2011)」概要
(資料 1 参照)

【目的】

政府・政府機関、企業、メディア、アカデミア、NGOの5つのステークホルダーの第一線で活躍するプロフェッショナルによるレクチャーを聞き、知識・スキルの習得、フィールドワーク、アクション・プラン作成、発表という実践的プログラムを通じて、グローバルな視野と分野横断的な知識をもち、グローバルヘルスに貢献できる即戦力となる人材輩出を目指す。そのプログラム運営を通じて、マルチステークホルダーによる連携、グローバルヘルス課題の啓発・意識向上のための人材養成プログラムのモデル構築を目指す。

【開催期間】

2011年7月28日（木）～8月6日（土）

【開催場所】

東京大学本郷キャンパス

【応募資格】

大学、大学院に所属する学生（海外の大学、大学院に所属あるいは海外の大学院への進学が決まっている学生、留学生含む。）

【主催】

特定非営利活動法人 日本医療政策機構 /
東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室

【プログラム内容】

本プログラムの構成は、以下の6つを主要項目とした。

1. スキル研修

問題解決フレームワークやコミュニケーションスキル研修を行い、参加者の意識を共通化することで、研究の基盤整備とするとともに、

必要な基礎スキルを習得させる。

2. レクチャー

幅広い領域においてグローバルヘルス課題に取り組む第一人者からの講義を受講することで、各立場からのグローバルヘルス課題の現状と課題の認識、アクション・プラン作成に向けた知見を得る。（資料2参照）

3. リフレクション

映像ドキュメンタリーを用いてレクチャーの内容の要点を捉えなおすことで参加者意識をアクション・プラン作成に向けて誘導するとともに、参加者の理解度の定点観測機会とする。

3. フィールドワーク

希望班については、外部の国際保健関係者へインタビューを行う期間を設け、課題の抽出、打ち手の立案、決定、プログラムの実施可能性を探る際に、実際に現場で活躍する専門家の知見を得る機会を創出する。

4. キャリアフォーラム

グローバルヘルス分野でグローバルな活躍をしている若手日本人と参加者の直接的な交流機会を提供することで、グローバルヘルス分野での人材養成に関して、参加者がキャリアガイダンスを受ける機会とする。（資料3参照）

5. アクション・プラン作成・発表

全プログラムを経て、参加者が、国際保健課題解決のためアクション・プラン作成、実施し、専門家や社会起業家等を前に報告することで、社会で活躍する専門家からのフィードバックを受け、グローバルヘルス分野に関する参加者のさらなる意識向上を目指し、人材養成に寄与する。（資料4参照）

【アクション・プラン課題】

アクション・プランは、以下の課題を設定した。

・現地でポリオの現状を目にしたあなたは、日本に帰り、ポリオ撲滅に向けて何らかのアクションをとりたいと思いました。これまでの日本の取り組みや課題を踏まえ、ポリオ撲滅に向けたアクション・プランを考え、その実現に向けて、行動を起こして下さい。

【講師派遣機関・団体等（五十音順）】

（計 14 機関・団体）

政府・政府機関、企業、アカデミア、NGO の 4 つのステークホルダーより 15 名の講師が本プログラムに参画した。

政府・政府機関

外務省、世界銀行、世界保健機関、国連児童基金

企業

エーザイ株式会社、株式会社キャンサーズキャン、ツイッター社

アカデミア

自治医科大学、東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室、ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センター

NGO

一般財団法人 教育支援グローバル基金、世界の子どものワクチンを 日本委員会、TABLE FOR TWO International、特定非営利活動法人 日本医療政策機構

【メンター派遣機関・団体（五十音順）】

（計 4 名）

・株式会社キャンサーズキャンより 1 名

・soket より 1 名

・東京大学大学院 工学系研究科より 1 名

・ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センターより 1 名

【アクション・プラン作成プロセス】

アクション・プラン作成プロセスは以下の四つの構成で実施した。

1. 課題の設定：問題の背景および範囲と重大さ

（プログラム：事前課題、プレナリー・セッション、基本スキルレクチャー）

2. 現状理解と政策の選択肢の検討：課題の分解と絞り込み・構造の把握・仮説の設定と検証を経て、打ち手の立案・比較・選択

（プログラム：分野横断的な講師によるレクチャー、リフレクション）

3. 提言・実行戦略：提言の選択理由・実行戦略の概要

（プログラム：アクション・プラン作成、中間報告会）

4. アクション・プラン報告

アクション・プランは、新規性、実現性、問題解決性、成長性、実現に向けたアクション度の 5 項目で評価をした。報告会には、国際保健・医療の専門家や実業家等が参加した。

【本プログラムへの参加者】

本プログラムへ参加した審査員は以下の通りである。

・黒川清（日本医療政策機構代表理事）

・齋藤ウィリアム浩幸（株式会社インタカ一代表取締役社長、日本医療政策機構理事）

・坂之上洋子（ブランド経営コンサルタント）

・ 渋澤健（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役、日本医療政策機構副代表理事）

・ 渋谷健司（東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授）

・ 吉田裕明（日本医療政策機構理事・事務局長）

【最終報告会】（資料4）

日時：2011年8月6日（土）

午前10時～正午

場所：東京大学 福武ラーニングシアター

<各班による報告>

- A 班

「Polio Raises Leaders：非常在国にてポリオ対策を継続するための人材養成」

- B 班

「Final Click for Polio：facebook を利用した協賛企業による寄附」

- C 班

「Happy Poli Poli Project：ワクチン接種のインセンティブとマイクロインシュアランスによるQOLの向上」

- D 班

「Bands Project：虫除けバンドを用いたインセンティブキャンペーンの実施」

5. 報告書の作成・公開

本プログラムのプログラム内容や参加者の感想等を含む報告書（日英）（資料5）を作成し、日本医療政策機構のウェブサイトにて公開し、広く国内外に発信した。

6. 卒業生のフォローアップ

東京大学では、2010年より「Global Health Leadership Program(GHLP)」を開講し、博士課程を中心とした学生や社会人を対象に、約3か月の国際保健分野の人材養成プログラムを行っている。

本プログラムは、研究分担者である、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教授の渋谷健司氏が中心となって運営し、海外でのインターンシップ機会の提供を含む、実践的なカリキュラムとなっている。

サマープログラムの卒業生にはGHLPへの参加を奨励し、平成22年度の参加学生27名中3名がGHLPへ参加し、平成23年度の参加者学生20名中1名がGHLPへ参加した。このように、学部生、大学院生を対象とした、「グローバルヘルス・サマープログラム(GHSP)」と、博士課程の学生を対象としたGHLPは、相乗効果を生み、学生の国際保健学習を中長期的にサポートする仕組みとして機能し始めた。

また、国際保健に関する実践研修の場として、日本医療政策機構ではインターンシップ生を受け入れ、平成22年度の参加学生27名中4名を受け入れた。

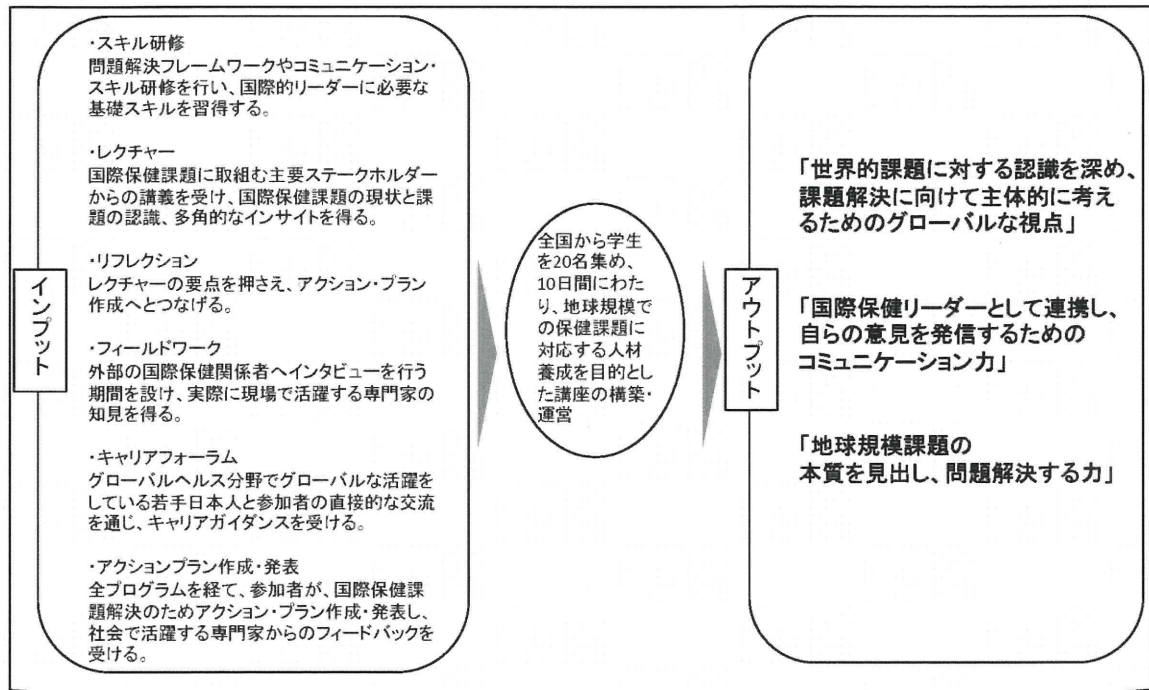
このように、大学生、大学院生対象の人材養成講座実施後も、より実践的な次なるステップとしての人材養成講座の設置、インターン機会の創出により、中長期的なキャリア構築のサポートを行っている。

【フレームワーク】

本研究のフレームワークとしては、図2を用いる。人材養成プログラムの項目として、「スキル研修」「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラム」「アクション・プラン作成・発表」を実施し、これらを実証研究における「インプット」とした。

一方、実証研究におけるアウトプットとしては、2010年度の研究成果で提示された、国際保健の人材養成のために必要な社会的施策である「グローバルな視野を持ち国際保健課題に取り組む人材の輩出と、そのメカニズムの設計」に注目し、それらを具体化すべく、「世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバ

図2. 研究のフレームワーク



地球規模での保健課題に対応する人材養成が目的とするアウトプットへのインパクトを検証する。

図3. 研究結果: プログラム項目毎にみたアウトプットへのインパクト及び参加者の意識醸成

インプット	アウトプットへのインパクトの有無			参加者の意識醸成へのインパクト
	世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点	国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力	地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力	
プログラム名				参加者のコメント
DAY 1-3 スキル研修		○	○	アクションプラン作成に向け、論理的に思考し、効率的に進める上で有用な問題解決力を学んだ。自分が日頃出会う課題も応用できる有効な思考法、コミュニケーション法を学んだ。
DAY 1-3 レクチャー	○			多様な講義により、世界中の日本として課題を捉えることの重要性を再確認することができた。現場で経験を積んできた方の問いかけは、自分自身の価値観を非常に揺さぶられる経験になった。
DAY 1-3 リフレクション	○			レクチャー中の議論の内容を振り返ることができ、各講義間の繋がりと主題との関連付けを行い、プログラム全体を大きな枠組みで考えるのに役立った。
DAY 4-7 フィールドワーク	○	○	○	異なる分野を専攻している学生や外部専門家へのインタビューから、視点の違いや発案内容の多様性を学び、課題解決に向けて多様な分野の専門家が議論を重ねる重要性を感じた。
DAY 7,9 キャリアフォーラム	○			国際舞台の実践で活躍するためには、どのような姿勢やスキルが重要かを学ぶことができ、キャリアの観点で参考になった。
DAY 8-10 アクションプラン作成・発表	○	○	○	社会課題は、自分が主観的に課題に気づき、自分がいかに主体的に課題に関わっていくかが重要だと再認識した。説得力あるアクション・プラン発表に向けて、どのように課題を捉え、班員の意見を集約していくかを学んだ。

プログラム6項目が相互補完的な役割を果たし、プログラムが目的としたアウトプットの実現につながった。

ルな視点」「国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力」「地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力」の3点を掲げた。

よって、本研究では、昨年の研究を踏まえ、マルチステークホルダーの参加を前提としつつ、発展させた6つのプログラム項目を「インプット」と定義し、各項目における参加者の意識醸成を通じ、人材養成で養成すべき「アウトプット」に与えるインパクトを検証した。

「インプット」となる人材養成プログラムの項目であるが、参加学生の主体性を引き出すことがアウトプットへのインパクトにつながると考え、平成23年度の人材養成講座は最終項目として「政策提言作成」を挙げていたのに対し、平成23年度は、「政策提言作成」を「アクション・プラン作成」へと変更した。

その理由は、前年度の経験をもとに、より参加学生の自由度を高め、自らどのようなアクションをとるかを考え、その上で彼らをサポートする仕組みが重要であると考察したためである。そこで、プログラムの成果物を「政策提言」として日本政府への提言をするかたちから、自らが多様な機関を巻き込み、課題解決に向けたアクションを起こす、「アクション・プラン」を作成・実行することに変更した。また、アクション・プランの作成にあたっては、フィールドワークの期間を4日間設け、希望班については、外部の国際保健の専門家と自由にコンタクトを取り、実際に現場で活躍する専門家の声を聞き、課題の抽出、打ち手の実現可能性を考察する機会を設けた。さらに、10日間という限られた期間ではあるが、可能な範囲で、アクション・プランを実行するところまでをゴールとした。

さらに、学生の自由度を高めると同時に、そのサポートとして、メンター制度を充実させた。今回は、アクション・プランの作成及び可能な範囲での実行までが課題であるため、実社会で活きた

「問題解決手法」を実践している、4名の若手をメンターとして招き、基本的に各班に1名のメンターがつく体制を整えた。プログラム初期の段階でメンターを紹介し、その後はメールや電話等で自由に学生がメンターと連絡をとり、フィールドワーク、アクション・プラン作成の期間中、メンターは、多様な角度から学生を支援した。

C. 研究結果

図3は、インプットである6つのプログラム項目「スキル研修」「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラム」「アクション・プラン作成・発表」による、3つのアウトプットへのインパクトの有無、及び各プログラムに対する、学生の視点をまとめたものである。

本研究により、地球規模の保健課題解決に向けたアクション・プランを作成という、参加者の積極関与が求められる成果物作成に向け、参加者が各プログラムを順に受けることにより、人材養成が目指す、「世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点」「国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力」「地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力」の3つのアウトプットへとつながることが判明した。すなわち、課題解決に向けたアクションを考案する、という参加者の主体性を引き出すゴールを設定し、「スキル研修」「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラム」「アクション・プラン作成・発表」の6つのステップを組むことにより、国際保健人材に求められる能力の養成が可能である。以下、アウトプット別に各インプット項目がどのような役割を果たしたかを示す。

1. 世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点

アウトプットの第一項目である「世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点」において、「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラム」「アクション・プラン作成・実行」の5項目のプロセスが相互に影響し合い、学生のグローバルな視点の養成を促した。

第一に、レクチャーは、平成22年度の研究結果をもとに、政府・政府機関、企業、アカデミア、NGOのマルチステークホルダーの講師陣により、国際保健課題に関する、多様な視座を提供した。

次に、レクチャーの学びを深化させ、自ら考察する機会としてリフレクションを設けた。リフレクションは、①映像ドキュメンタリーによる振り返り②リフレクションシートの執筆・提出の2段階で行った。

映像ドキュメンタリーの作成は、神戸芸術工科大学デザイン学部プロダクトデザイン学科准教授の曾和具之氏研究チームの協力を得て、行った。映像ドキュメンタリーは、講義の様子をビデオカメラ、デジタルカメラで撮影したものを、講義の重要ポイントや議論の盛り上がりを中心に、5分程度のドキュメンタリーにその場でまとめたものである。ドキュメンタリーを通じ、1日の終わりに、4コマの講義を短時間で振り返り、そのポイントを映像と共に思い出す機会を設けた。本ドキュメンタリーは、メンターや最終日の報告会時の審査員とも共に見る時間を設け、プログラム全てに参加していなかった人も、学生の学びのプロセスを共に振り返り、共有することができた点でも有益であった。

また、学生は、1日の講義で印象深かった点、それに対する自分の考察をまとめたものを提出し、運営側は、学生の理解度の定点観測を行った。

続くフィールドワークでは、レクチャーによる学びをもとに、課題に対する考察を行い、外部の国際保健専門家からのインプットを得て、課題に対する理解を深め、課題の抽出、アクション・プ

ランの立案、その実現可能性を図った。

さらに、キャリアフォーラムのセッションでは、世界的課題解決のためにNGOや財団法人を立ち上げた若手や、世界銀行の職員を招き、どのように今のキャリアに至ったのか、国際的なキャリアを歩むために学生が習得すべきこと等の話を聞くセッションを設けた。

最終プロセスとして、各班でまとめあげたアクション・プランを全参加者の前で発表し、グローバルに活躍する審査員のフィードバックを受けることにより、自らの成果物をグローバルな視点で捉えなおす機会を創出した。

これら5つのステップを通じ、学生に、世界からみた日本の立ち位置、日本に求められる役割、自分にできるアクションを考える機会を与えることにより、学生のグローバルな視野の養成につながることができた。

2. 国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力

アウトプット第二項目である「国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力」の養成においては、「スキル研修」「フィールドワーク」「アクション・プラン作成・実行」の3プロセスが重要な役割を果たした。

スキル研修では、「インタビュー・プレゼンテーション手法」について参加型形式の講義で、基本スキルや思考法を学ぶ機会を設けた。

続くフィールドワークでは、5人ごとに4班に分かれ、各メンバーが意見を出し合いながら、課題解決に向けた班の方針を討論した。班員は、比較的異なる学部のメンバーで構成されるように調整し、多様なバックグラウンドをもつ学生が、一つの課題に向けて議論を行う環境を用意した。また、学生には必要に応じて外部の専門家へのインタビューを行うよう奨励し、外部専門家と面談をとり、必要な情報を得るためのコミュニケーション力も試された。

アクション・プラン報告会にあたっては、前日に中間報告の機会を設け、効果的なプレゼンテーション方法についてフィードバックを受けた上で、本番に臨み、2度のステップによってプレゼンテーションスキルを身につける機会を提供した。

このように、基本の学習、フィールドワークでの議論、外部へのインタビュー、報告会でのプレゼンテーションという段階を経て、将来国際的に活躍するリーダーのため、他者との連携及び、効果的な議論の推進法、自らの意見を発信するコミュニケーション力を養成した。

3. 地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力

アウトプットの第三項目である「地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力」については、「スキル研修」「フィールドワーク」「アクション・プラン作成・発表」のプロセスを通じて、問題解決と戦略的思考の養成を行った。

スキル研修では、元コンサルタントによる研修によって、実際に練習問題を解きながら、問題解決力と戦略的思考法の基礎を習得した。続く、フィールドワーク及び、アクション・プランの作成・実行では、適宜メンターのアドバイスを受けながら、ロジックツリーを用い、課題の分析、解決策の立案を行った。フィールドワークで得た、国際保健に携わる専門家からの生の情報をもとに、繰り返しプランを練り直し、課題解決のための戦略の策定を行うこととなった。

このように、基本の習得、外部の情報をもとにロジックツリーを作り直し、論理的で積極力あるアクション・プランへと練り直すプロセスを経て、参加学生の問題解決力養成を促した。

D. 考察

以上の研究において、国際保健の人材養成講座における「スキル研修」「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラ

ム」「アクション・プラン作成・発表」の6つの項目をインプットとし、プログラムを通じて養うべき、3つのアウトプットである「世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点」「国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力」「地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力」へのインパクトを検証した。

研究の結果、地球規模の保健課題解決に向けてアクションをおこす、という参加者の主体性を引き出すテーマのもと、6つの項目が相互補完的に役割を果たし、国際保健課題に対応する人材に求められる能力強化への意識醸成が確認されたが、さらなる考察として、アウトプットのインパクトを最大化するために人材養成プログラムの強化及び普及に有用と考えられる、以下、4つの施策を提示する。

・人材養成プログラムのモデル発信

本研究を通じて構築した、人材養成講座のモデルを波及させ、全国の多様な地域での実施を目指し、本カリキュラムの内容を、ウェブサイト等を通じて国内外に発信することが重要である。また、他地域での実施を希望する学術組織や団体があつた場合には、知見、ノウハウを共有し、人材養成カリキュラムの波及により、全国でより多くの地球規模課題に対応する人材養成を推進していくことが求められる。

・現地視察を含むフィールドワークの実施

国際保健を学ぶ上で、理論のみならず、現場のステークホルダーと協働し、課題を解決する力を養うことが必須である。そのためには、インタビューのみならず、実際に現地視察を通じ、学生が自らの眼で見て、体得した経験をもとに学びを深めることが有益であると考えられる。このような視察を可能にするためには、主催者が、現場で活動する保健医療機関やアカデミア、NGO等とのネ

ットワークを保持していること、視察を行う上での十分な財政基盤があることが求められる。国際保健分野の人材養成メカニズムを継続的・体系的に発展させていくためには、財政的・制度的な支援が期待される。

・フォローアップ機能の強化

国際保健課題に関心を持つ人材が当該領域での活躍を促進するためには、①ネットワーク維持の仕組み②キャリア構築支援③インターン等の実践研修の場の提供による、卒業生を一貫してフォロー・支援する体制が有用であると考えられる。ネットワーク維持は、ソーシャル・メディアやメーリングリストなどの仕組みを用いることにより、参加者が連絡を取り合える環境整備を行うことができる。また、卒業生の各自の進路に合わせ、希望者が国際保健のミドルキャリアの先輩から、キャリアガイダンスを受けるメカニズム構築、さらに、インターン機会の提供により、国内外での実践を通じて、グローバルに活躍するための知識とスキルを習得し、即戦力となる人材の育成が可能になると考えられる。

・海外とのネットワーク構築

国際保健課題自体が地球規模課題であることを踏まえると、中長期的には海外諸機関と密なネットワークを築き、グローバルな知見を盛り込んだ事業運営を行うことにより、さらに人材養成にインパクトのあるプログラム構築へとつながる。国際的な知見を継続的に取り込んでいくためには、運営者が人材養成プログラムの内容を国内外に発信し、海外の重要ステークホルダーと継続したパートナーシップを組むことが重要である。

E. 結論

上記実証研究を通して、地球規模での保健課題に対応する人材養成のための、インパクトあるカリキュラムモデルのあり方を検証すべく、人材養成講座のパイロット運営を行った。当該研究を通

じ、地球規模の保健課題解決をテーマとした人材養成講座の「スキル研修」「レクチャー」「リフレクション」「フィールドワーク」「キャリアフォーラム」「アクション・プラン作成・実行」の6項目が相互補完的な役割を果たし、「世界的課題に対する認識を深め、課題解決に向けて主体的に考えるためのグローバルな視点」「国際保健リーダーとして連携し、自らの意見を発信するためのコミュニケーション力」「地球規模課題の本質を見出し、問題解決する力」の3点の養成に有用であることが示された。また、人材養成カリキュラムの強化及び波及のために、「人材養成プログラムのモデル発信」「現地視察を含むフィールドワークの実施」「フォローアップ機能の強化」「海外とのネットワーク構築」の4つの施策を提示した。

平成24年度以降も、地球規模での保健課題に対応する人材養成への更なる貢献を目的とし、これら4つの施策を念頭においた、より進化した人材養成プログラムの運営、また人材養成カリキュラムの波及を目指す。

F. 健康危険情報

・特記事項なし

G. 研究発表

・なし

添付資料

- 資料1 グローバルヘルス サマープログラム 2011 概要
- 資料2 講義録
- 資料3 キャリアフォーラム
- 資料4 アクション・プラン
- 資料5 グローバルヘルス サマープログラム 2011 報告書

グローバルヘルス サマープログラム 2011 概要

目的	<p>世界を舞台にグローバルに活躍し、より良い社会の実現に貢献することをキャリアにしたいと考える若者を対象とした、グローバルヘルス分野の次世代リーダー養成プログラムとして「グローバルヘルス サマープログラム 2011」を開催した。</p> <p>グローバルヘルスや各界のリーダーや社会起業家によるレクチャーを受けた後、各チームに分かれ、フィールドワーク期間に、個人や団体、企業と議論、交渉を行い、社会にインパクトを与え得るアクション・プランを策定、報告を行った。</p>
開催期間	<p>2011年7月28日（木）～8月6日（土）</p> <p>開催期間の決定にあたっては、スキル研修、レクチャー、アクション・プラン作成という本プログラム内容を配分する上で、効果的な日程数を算出した。さらには、多様な学生の参加を担保するため、学生の夏季休暇中の日程を開催期間とした。</p>
開催場所	<p>東京大学本郷キャンパス</p>
応募資格と募集要項概要	<p>大学、大学院に所属する学生（海外の大学、大学院に所属あるいは海外の大学院への進学が決まっている学生、留学生含む。）</p> <p>全国より36名の応募があり、20名を選出した。応募者に課した以下の3つの設問に対する解答をもとに合格者の選考を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 将来のキャリアプラン（中長期的に取り組みたい仕事）および本プログラムへの参加希望理由を具体的に述べてください。両者に関連があればそれも分かりやすく述べてください。（300字程度） 2. グローバルヘルス分野において特に関心のある課題について、解決策やご自身の考え等を自由に述べてください。（300字程度） 3. ご参考までに、本プログラムをどのように知ったか、ご記入ください。
主催	<p>特定非営利活動法人日本医療政策機構 / 東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室</p> <p>共催団体・機関双方による付加価値を担保することにより、プログラムの先進性を求めた。</p> <p>特定非営利活動法人 日本医療政策機構</p> <ul style="list-style-type: none"> - 非営利、超党派の民間シンクタンクとしての国内外の中立的な人的ネットワーク - 海外先進事例研究により集積した国際保健の最新の潮流及び人材ニーズに関する研究蓄積政策提言プログラムにより集積したオペレーションに関する知識、経験

	<p>東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室</p> <ul style="list-style-type: none"> - 研究を通じて獲得した国際保健政策分野における学術的知見 - 参加者の最適な学習環境のための東京大学の施設、設備の提供
プログラム構成	<p>本プログラムの構成は、以下の5つの主要項目からなる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. スキル研修 問題解決フレームワークやコミュニケーションスキル研修を行い、参加者の意識を共通化することで、研究の基盤整備とするとともに、必要な基礎スキルを習得させる。 2. レクチャー グローバルヘルス課題に取り組む、マルチステークホルダーからの講義を受講することで、各立場からのグローバルヘルス課題の現状と課題の認識、アクション・プラン作成に向けた知見を得る。(資料2参照) 3. リフレクション 映像ドキュメンタリーを用いてレクチャーの内容の要点を捉えなおすことで参加者意識をアクション・プラン作成に向けて誘導するとともに、参加者の理解度の定点観測機会とする。 4. フィールドワーク 希望班については、外部の国際保健関係者へインタビューを行う期間を設け、課題の抽出、打ち手の立案、決定、プログラムの実施可能性を探る際に、実際に現場で活躍する専門家の知見を得る機会を創出する。 5. キャリアフォーラム グローバルな活躍をしている多様なキャリア体験者と参加者の直接的な交流機会を創出することで、グローバルヘルス分野での人材養成に関して、参加者が定性的情報を獲得する機会とする。(詳しくは資料3参照) 6. アクション・プラン報告会 全プログラムを経て、参加者がアクション・プランを発表することで、マルチステークホルダーによるプログラム構成が、どのように参加者意識に影響を与えたかについて、観測機会を設ける。さらには、各班の報告に対して、政策立案者、講師よりフィードバックを得ることで、グローバルヘルス分野に関する参加者のさらなる意識向上を目指し、人材養成に寄与する。(詳しくは資料4参照)
テーマ	<p>グローバルヘルスという重要な地球規模課題に対し、日本が継続して貢献していくために、官民を巻き込んだどのようなアクションがあり得るのか、グローバルヘルスにおける重要課題である、「ポリオ撲滅」をミッションとして具体的な解決策を考えます。</p>

<p>講師派遣 機関・団体 等</p>	<p style="text-align: right;">(計 14 機関・団体、五十音順)</p> <p>政府・政府機関、企業、アカデミア、NGO の 5 つのステークホルダーより 15 名の講師が本プログラムに参画した。</p> <p>政府・政府機関 外務省、世界銀行、世界保健機関、国連児童基金</p> <p>企業 エーザイ株式会社、株式会社キャンサーズキャン、ツイッター社</p> <p>アカデミア 自治医科大学、東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室、ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センター</p> <p>NGO/NPO 一般財団法人 教育支援グローバル基金、世界の子どもにワクチンを 日本委員会、TABLE FOR TWO International、特定非営利活動法人 日本医療政策機構</p>
<p>メンター 派遣機関 ・団体</p>	<p style="text-align: right;">(計 4 機関・団体より 4 名、五十音順)</p> <p>参加者が習得した知識をもとにアクション・プラン提言を作成するにあたり、政策及びグローバルヘルスに関して適切な助言を行うことができる以下の 4 名がメンターとして本プログラムに参加した。メンターはプログラムに常駐し、参加者と密なコミュニケーションを図りながら指導にあたった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・株式会社キャンサーズキャンより 1 名 ・ソケットより 1 名 ・東京大学大学院 工学系研究科より 1 名 ・ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センターより 1 名
<p>アクション・プラン 作成プロセス</p>	<p>アクション・プラン作成プロセスは以下の四つの構成で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 課題の設定：問題の背景および範囲と重大さ (プログラム：事前課題、プレナリー・セッション、基本スキルレクチャー) 2. 現状理解と政策の選択肢の検討：課題の分解と絞り込み・構造の把握・仮説の設定と検証を経て、打ち手の立案・比較・選択 (プログラム：分野横断的な講師によるレクチャー、リフレクション) 3. 提言・実行戦略：提言の選択理由・実行戦略の概要 (プログラム：アクション・プラン作成、中間報告会) 4. アクション・プラン報告 (アクション・プラン報告会)
<p>アクション・プラン 報告会</p>	<p>日時：2011 年 8 月 6 日 (土)</p> <p>午前 10 時～正午</p> <p>場所：東京大学 福武ラーニングシアター</p> <p>発表テーマ：ポリオ撲滅に向けたアクション</p>

講義録

1. 近藤 正晃 ジェームス (ツイッター社日本代表)
2. 平林 国彦 (国際連合児童基金 東京事務所代表)
3. 金森 サヤ子 (外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官)
4. 黒川 清 (特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事)
5. 山崎 繭加 (ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト)
6. 尾身 茂 (自治医科大学教授)
7. 石川 善樹 (株式会社キャンサースキャン ディレクター)
8. 渋谷 健司 (東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授)
9. 新井 俊郎、窪田 順子 (世界の子どもにワクチンを 日本委員会)
10. 岡安 裕正 (世界保健機関 ポリオ撲滅イニシアティブ 医官)
11. スリングスビー B.T.(エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ ディレクター)

日付	2011年7月28日(木)
講師	ツイッター日本代表 近藤 正晃ジェームス
カテゴリー	企業
主なテーマ	グローバル課題に対するソーシャル・メディアの可能性～世界を動かすツール～
概要	<p>本講義では、講師自身がこれまで取り組んできた医療政策・グローバルヘルス課題への取組みに続き、震災時の実例を参考に、ツイッターなどのソーシャル・メディアが世界的課題に対して果たし得る役割について考えた。</p> <p>かつては、社会問題の解決は政府へ提言し、政府を動かすことが重要、と考える人が多かったが、従来のメディアよりも情報伝達が速いフェイスブックやツイッターを用い、市民が自分たちで変革を起こそう、という動きが出てきた。2011年初頭にはチュニジアを皮切りに中東でツイッター革命が起き、3月の大地震で、日本人も時を同じくしてツイッターの持つ力、影響力を知るところとなった。</p> <p>大事な人に一番早く伝達するための手段、そして、世界中の多くの人に瞬時に情報を伝達する手段であるツイッターは、トップダウンではなく、ボトムアップ型の手法で、今後も様々な課題を解決するのに役立つだろう。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、サマープログラムの第一講義として、現在 Twitter 日本代表を務める近藤氏が考えるソーシャル・メディアの役割について聞き、身近で誰もが気軽に使えるツールである Twitter が、世界的課題に対してもたやす可能性について考えることを目的とした。Twitter によって瞬時に多くの人に情報を伝達できることにより、ボトムアップによる社会的な課題設定と解決の可能性が広がるのではないか、という話があり、社会的課題に対し、ソーシャル・メディアが果たし得る役割について考える機会となった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何らかの命題に対して、アクション・プランを作成する際に、ステークホルダーを列挙し、ステークホルダー間の利害関係を整理したうえで、何が原因となってその命題が解決へとつながらないか考えることが重要であると分かった。東日本大震災の際に、①親しい人と連絡を取る手段②リアルタイムで情報を得る手段③一個人が課題設定を行い、また別の一個人がその解決策を明示し、不特定多数の人が共有できるツール、に関する説明が明確で印象的であった。 ・ ポリオ根絶についてのアプローチが印象に残った。主体を挙げ、似たものを整理し、それぞれの主体の利害関係を明らかにし、関係性を整理し、実行のネックとなっている箇所を洗い出す。特別複雑なプロセスではないが、問題へ取り掛かる大事な一歩目である。